

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 ^{キム}金 ^{ジョンヒ}静熙

本論文は、『源氏物語』が他者の理解不可能性によるアイロニカルな人間関係の悲劇を織りなしてゆく方法を、テキストの精緻な分析を通して解明したものであり、Ⅰ「方法としての理解不可能性」、Ⅱ「物語の表現と構造」、Ⅲ「作中人物の関係による展開」の三部に分かたれた八章から構成されている。

Ⅰ「方法としての理解不可能性」は本論文全体の問題意識と分析の方法を提示している。第一章「葵巻のリアリティー生霊現象を中心に一」は、六条御息所の生霊化をめぐって従来解釈が対立していた諸点について、そうした点を一義的に決定できないような曖昧さこそ、この物語のテキストの本性なのであり、現実の人間がそうであるように、虚構の作中人物が読者に対して理解不可能性をはらんでいるものとして描かれるところから、この物語独特の奥行き深いリアリティーが生まれているのだとする。第二章「若菜巻の紫の上」は、従来、女三の宮降嫁によって光源氏と紫の上とは互いの心がまったく隔絶したかのように論じられることが多かったが、光源氏は紫の上の苦悩を思いやっており、紫の上もまた光源氏の愛情を求めているのであって、しかもなお互いの心が通い合わなくなっているところにこそ深切な悲劇性があるのだということを明らかにしている。第三章「夕霧と落葉の宮の結婚一錯綜する人間関係一」は、夕霧と落葉の宮との関係が、宮の母一条御息所の心労となり、ついに母御息所を死に至らしめるという夕霧巻の物語について、この三者がそれぞれに誠実に相手の心を理解しようとしていながらそこにどうしても誤解がはさまれ、また自分が他者の目にどう映じているかという自意識も主観の偏差をまめかれないような、アイロニカルな人間関係の悲劇として描かれていることを克明に分析している。

Ⅱ「物語の表現と構造」は、上記のような視点による表現分析を、さらに大きな物語の構造の解明へと押し及ぼしたもので、第一章「柏木物語—光源氏物語における位置—」、第二章「宿木巻の〈時間と〉〈空間〉—宇治との関連性を示す「宿木」の表現を中心に—」、第三章「浮舟巻の表現構造—贈答歌を中心に—」の三章から成る。

Ⅲ「作中人物の関係による展開」は、Ⅰの表現分析の方法とⅡの構造分析とを組み合わせたかたちで宇治十帖全体を包括的に論じたもので、第一章「宇治十帖の方法—薫と大君の恋物語をめぐって—」、第二章「物語の終焉—人間関係における「あはれ」をめぐって—」の二章から成る。

いずれの章も、明確にして尖鋭な問題意識に貫かれており、また歴大な先行研究の論点をよく整理した上に、物語本文の精確な解釈を丹念に積み重ねて立論されている。それでもなお、まだじゅうぶんに論が精練されていない箇所も散見するのであるが、全体としてはひじょうな労作であり、かつ幾多の新見にも富んでいる。よって審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。